
ヒエ魂!!

夢町斗備

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒエ魂！！

【Nコード】

N2807J

【作者名】

夢町斗備

【あらすじ】

少年『建正』、師匠と共に日本に降り立つ。今や日本は靈力飽和状態の非常事態（一部の人には。もちろん妖怪もね）。理不尽な師匠の命令に逆らうことも出来ず、建正はトゥーキックを喰らいながら異変の解決に乗り出していくのだった。

? ユメヲトキ

歩みの速度を徐々に上げていく、いや上げてしまう。急いではいけない。僕の役割は陽動なのだ。それでも自然と足が速くなってしまうのは僕の臆病な心のせいだろう。おいおいミスターチキンハートこんなことでビビってんのかヨ。マジ男下げるぜ、ドン引きだっぜい。自分で自分を軽く罵ってみたが所詮自分の考えていること故に痛くも痒くもない。侮蔑や罵倒は自分以外の誰か他の人にやってもらうのが一番いいのだ。しかし今ここには僕一人しかないのだ、人間では。背後に生物的な生温い空気を感じる。振り向いてはいけない。気づかないフリをするんだ。いや、ムリだつて。もう首筋に生温い息が当たってるんだから。ポイントはまだか、まだなのか。もうダメだ。ヤバイ。ものすげー危険な感覚が背後からピンピン伝わってくる。くくくッ、げ、限界だっ!!

「物理攻符『牙突』ッ」

振り向きざまに懷に隠し持っていた霊符を投げつける。霊符は化物の右肩に張り付きその肩に大きな風穴を開けた。

ウキョオオオオオオオ!!

凄まじい絶叫。これが今回のターゲット【猩猩】。年経た狒々が妖怪化したものだ。しかもこいつは妖怪化してからかなりの時間が経っているらしくかなりの知識を持っている。厄介な相手だ。だからこそ僕は囷にされた訳なのだが。だが囷役は失敗。このまま戦闘に突入するしかなさそうだ。

霊符ホルダー装着。ちょうど胸の位置に符の取り出し口があり便利だ。しかも蓋付きで符が零れない。

しかしこの猩猩。僕が勝てる相手なのか。勝てる勝負しかないわけじゃないが、リスクはなるべく抑えたい。符は十分。相手には手傷を負わせた。好条件ではある。しかし相手は大妖にも匹敵するほどの年月を生きている。経験が違う。

不吉な音が耳に届く。光の半球が歪む。

耐えろ、耐えしのげ、お願いだ、もし破られれば僕に待っているものは

『死亡・撲殺・凄惨・死滅』

陰惨な結末だけだ。

しかし最悪な結末はすぐそこまでひたひたと這い寄って来ていた。ギシシギシイ、ビキビキッ。

「！！ やばっ、亀裂が」

光の半球は最早限界だった、いや臨界だった。半球というのも名ばかりで今や変形したマシユマロのような様相である。

「ぐうう。マズイ、破られるう……！！」

ダメだっ、もうッ……。

パキン。

符が破られた。眼前には密度の塊。圧倒的な力。僕を肉の塊にしてしまうであろう非情。

あ、死んだなーコレは。短い一生でしたが色々な事がありました。もう満足です。後悔など微塵も残しておりません……スンマセン嘘です。うつわ、マジで俺死ぬの？ 死にたくねえー死にたくねえーよ。誰か助けてくれないかな。これって仮面をつけたヒーローが颯爽と現れて僕を助けてくれるようなシチュエーションだろ完璧に。現実の非情さをこんなところで見せ付けなくていいから、少しはフイクションに歩み寄るのも必要だと思っうよ、うん。って一人で納得してる場合じゃねーんだよ！！ ってツッコミいれてる場合でもねーんだってば！！ あーあーあー。死んだらどこに行くんだろうな。天国はお花畑？ それもメルヘンチックでいいかもしれない。ただし全部が彼岸花。怖ッ、それ天国じゃなくて彼岸じゃねーか。いやしかし赤く彩られた三途の川つてのも中々乙じゃないだろうか。赤って嫌いな色じゃないし案外ピクニクに最適かもしれない。赤い色って食欲増進させるしね。 あっ、でも……河原だから座ったら石でお尻が痛いな。ならいっそバーベキュースタイル。折りたた

み椅子持つてきて、テントなんかも建てちゃって、彼岸でまだうろろしてる幽霊（可愛い女の子）と仲良くなっちゃって、その後も色んな幽霊（これまた可愛い女の子）とお知り合いになって、皆が僕を取り合ってラブコメ合戦が始まっちゃう。ぼくはその中で一人の幽霊（栗色のふわふわ髪でアーモンド形の瞳をした『ばかつ』が口癖のちよつとひねた女の子。だけど実は涙もろくて良い娘なんだ）と一緒に三途の川を渡るんだ。その先は勿論地獄。血池地獄に針山地獄、釜茹で地獄、極寒地獄。想像を絶するような苦痛の波状攻撃。だけど僕は彼女（ツンデレってこういう娘のことを言うのかな）と一緒にだつたからこそ乗り越えることが出来た。僕らの愛の力に恐れをなした地獄の鬼たちは僕らを閻魔大王の前に突き出すんだ。閻魔大王は凄まじい声で僕らを罵倒した。いや罵倒してるかなんて解っちゃいなかったんだ。実は声がつぶれすぎて何を言っているのかあまり解らなかつたからただ喧しいだけだつた。一通り僕らに怒声を浴びせたあと閻魔大王は僕らを引き離そうとした。僕らは地獄で今までずっと抱き合っていたんだ。閻魔大王に命令された鬼たちが僕らを引き離しにかかるんだ。だけど僕たちは離れない。しっかりと痛いぐらいに抱きしめあつて「絶対に君を離さないからっ！！」「そんなの私だつて……ばかつ！！」って感じでクサイ台詞を真面目に言い合つて互いに存在を確かめ合つてそこで僕たちは初めてのキスをするんだ。キスの味はレモンの味。そんなことは解らない。ただ嬉しくてただ愛しくてただ……切なかつた。こんなに胸が締め付けられる事があるんだろうか。固く抱き合っていた二人も鬼の力には勝てずついに引き離されてしまうんだ。離れていく彼女（大きな瞳に涙を溜めて僕の名前を呼んでいる）に僕は叫ぶんだ。「僕は君を愛してるっ！！絶対に君を嫌いにならない！！永遠に僕は君の虜だああああ！！」。鬼に連れられ行く彼女（泣きながらそれでも無理矢理に笑顔を作っている）も叫ぶ。「私も愛してるっ！！嫌いになんてなるわけない！！こんなこと言わせないでよ、ばかつ！！！！」。僕も無理矢理に笑顔を作る。彼女（彼女は辛気臭

いのが好きじゃないと言つてバッドエンドの小説や映画を生前全く見ていなかったらしい)を悲しませない為にはこれが一番だと思つたんだ。だけど駄目だ。悲しい。悲しい。悲しすぎる。もう彼女(ばかつ、と言いながら僕の胸の辺りをよくポカポカと叩いていた。全然痛くないしむしろ微笑ましかつた)の姿は殆ど見えない。聞こえてないかもしれない。それでも僕は。僕は。「絶対にまた会えるからっ!! えぐ、絶対に…ぐう……会えるから!! 絶…うう…対会える…ふぐう…からっ!! あええ…る…か…らっ」。叫んだ。嗚咽交じりで何を言っているか解らないかもしれないけど叫んだ。僕の気持ち。願望。でも絶対に絶対に真実にしてみせるんだ。決意。固い決意。陳腐な表現だけれどもダイアモンドの様に固い決意。地獄がなんだ。地獄ごとき何でも無い。地獄全部を敵に回しても僕は彼女(上目遣いで頬を紅潮させて僕に好きだと告白してくれた)を助け出すんだ。たとえどんな障害が待ち受けて しよう
と も。

「…ろ」

何か声が聞こえた気がする。

「…きろ……か…し」

これは天の声か……?

「起きろ、馬鹿弟子ッ!!」

ズクシッ。

「ぐあほおっ」

脇腹を思いつきりトゥーキック。容赦のない一撃に僕の意識は急速に覚醒する。

「! 師匠! 何故ここに」

「貴様は馬鹿なのか。ほらアレからお前を助けてやったんじゃないか。覚えてないのか」

師匠が指差す先には巨大な猿の残骸。皮膚が裂け内臓が露出している様には吐き気を覚えた。

「あー【猩猩】ですね。そういえばアレと戦っていたんです」

「本来は戦う必要の無い役割なんだがな」

痛む脇腹をさすりながら師匠の皮肉をかわす。

「とりあえずミッシェンコンプリートってところですかね、師匠」

師匠は腕を組みながら満面の笑みで僕の顔面にトゥーキックをくれた。

「いったー。いてーつすよ、師匠。何するんですか」

鼻血がだらり。だらり。どばーっ。

鼻血の洪水など見向きもせずに師匠は僕に説教を始める。

「いいか。貴様は今日死んだ。私が助けなければ確実に貴様の命は絶たれていただろう。これは貴様の慢心が招いたものだ。解るな。

自分の力を過信し、相手を侮りそして敗れた。どれだけ無様なんだ。恥ずかしいにも程がある。それでも私の弟子か。確かに貴様は強い。そこの妖怪は手も足も出ないだろう。だが貴様には圧倒的に経験値が足りんのだ。全てにおいて最も重要なのは判断力だ。自分の力の強さ弱さなど関係ない。弱いなら弱いなりの戦い方がある。逃げるのも手の一つだ。相手が容易に倒せる相手なのか、実力伯仲の相手なのか、それともけっちゃんけっちゃんのメッタメタにされてしまっほどの実力差がある相手なのか。どんな戦法を使うのか。物理攻撃だとしたらそれはどのような威力か。どれくらいの範囲に及ぶのか。精神攻撃だとしたらそれはどのように精神に介入してくるのか。どのような効果をもたらすのか。全ての攻撃においてそれを受けた場合自分はどれだけの損害を被るか。相手を倒した場合のメリット・デメリット。倒された場合のメリット・デメリット。気になるあの娘のスリーサイズ。喧嘩したアイツとの仲直りメール。倒錯した昼ドラの恋愛事情における男の立ち位置。40歳になっても夢を追いつけている男の行方。この世の中全ては判断の世界だ。全てに最適な判断をすれば貴様の人生薔薇色だろう。人生薔薇色になるとあれだ。バックから自在に薔薇を出すことが出来るようになるのだぞー！！ ホレ見よー！！」

しゃらーん。ティラティラティラティラー。

真紅の薔薇が師匠の背後から妙にキラキラとした擬音と共に突如出現する。今の話から察するに師匠は恐らく人生薔薇色なんだろう。つてか最後のほうは説教ですらなかった気がする。

「はー師匠すげーっす。綺麗な真紅です。ついでに僕の鼻血もけっこー……」

鼻血はもう止まりかけていたが、僕の足元には既に血溜まりが出て来ている。

「……なんだ貴様は。汚いな」

「いやいや、師匠の薔薇といい勝負じゃないですか。こっちも綺麗な紅ですよ」

「貴様の体液と私の薔薇背景を比較するな。これも判断の問題だ。まだ理解してなかったか」

師匠はまた演説を始めてしまう。話好きの困った人だ。

それにしても気を失っていた間に何か壮大なストーリーが展開されていたような気がする。妙に熱い気持ちになったような気がするが……。まー、夢なんてものは深層心理に由来するとか言うけど、その実態はよく解っていない曖昧模糊な存在だ。何の夢。……解らない。てか完璧に忘れた。夢に執着するのも、忘却するのも師匠に言わせればきつと判断の世界なんだろう。

僕は忘却が『適』だと判断した（無意識だが）。

ただ何か頭の中に引っかかるものがある。ぐるぐると頭を回転させていると引っかかっていたものがぼとりと落ちてきた。

一文字。

『愛』

意味。……？ 不明。

頭に残っていた『愛』の一文字。……？

とりあえず『愛』について考えてみよう。

13歳の僕にとっては難しい題ではあるけれど。

？ユメヲトキ（後書き）

初めまして。夢町と申します。
拙い作品ですが読んでくださるとありがたいです。

？ マナビヤ（１）

僕は今高校に通っている。日々難しい数式を解いたり化学実験をしたり英文を読解したり世界の歴史について学んだり文芸の世界に浸ったりしている。学ぶことは成長すること。自分が成長していくのは純粹に喜ばしいことだ。

友達は少ないが質の良い友達が揃っていると思う。友達を作るのは正直苦手だ。ちょっと昔に自分の世界が崩壊してしまうような事件に見舞われたのがその原因である。説明すると長くなるので省くが本当に苦しくてパーソナリティが決壊してしまう程の出来事だったのだ。察してくれ。

「なー、何してんな？」

背後から声をかけられる。響くソプラノ。

「なーなー、何してんなーって？」

こちらの返答を待たずかけられる言葉。同時に背中をぱしぱしと叩かれる。

「なーなーなー、何してんなーっとー？」

ぱしぱしぱしぱし。

「なあっ！ー鬱陶しい」

振り返る。

びし。

顔面に手刀を食らわされる。

「あっあー、急に振り向くからさー。手刀は急に止まれないって言うじゃん。仕方ないなー？」

「いや、謝れよ」

べしっ、とチョップを返してやる。

うあう、と可笑しな呻きを漏らしながら二・三步あとずさる。

「や、女の子に暴力はいけないって」

何を言っているのだろうかコイツは。

しかもエリックじゃなくてジェームズのほうかよ！どうでもいいよマジで！

……疲れる。

死人。

幽霊。

そんな感じの存在。

それがコイツ。

『稗田神奈』

やけにハイテンションなこの幽霊は僕に取り憑いている訳ではない。

この学校に取り憑いている。いわば自縛霊。　ん、だったら取り憑いているわけじゃなくて縛られていることになるな。……まあ、どちらでも同じことだ。

何故か学校に居るときは僕にべったり。正直うっとおしいっただけじゃない。

特に胸が胸が胸が胸が胸が、あのでかいマシユマロみたいなおっぱいががががが。うっわあああああー！！

間……………。

失礼。取り乱しました。

落ち着いたところでとりあえず事情の説明だ。この馬鹿に元気な躁病気味の幽霊と僕がいきなり学校に通い始めたその理由。心配しなくて大丈夫。結構単純な理由だからさ。

？ マナビヤ（１）（後書き）

まだまだ続くよ！
時間はかかるかもしれませんがね……。

? マナビヤ (2)

とある人口世界一の国。一仕事終えてたんまりお給金を頂きまたもやぶらぶらと放蕩中の師匠と僕。その山奥にて野宿中の一風景。

「うらっ」

「んげふうっ!!」

特にすることも無く惰眠を貪っていた僕の脇腹に痛みが走る。
痛み?

そんなもんじゃねえ!

息が出来ない。

アレ? 僕死ぬんじゃね?

「だりゃー」

「ぐうはー!!」

ごろごろと地面を転がる僕の脇腹に痛みが走る。

さっきは右脇腹で今度は左脇腹。

なんだー、バランスとってるつもりか?

うつわ、いてー! 冗談じゃなくてさ! マジこれアバラいつちやるんじゃないのか。つか折れて刺さってるくせえぞ!? だって僕今血吐いたもん!?

「どうした? 大げさじゃないか弟子よ。しかしな、あまりに大げさにやりすぎると却って嘘っぽいぞ。嘘と言うのはだな聡明な人物には効果が無いものなんだ。ってことは私相手に嘘をついても意味が無いと言うことなのだ。分かるか? 分からんだろうな。貴様は有体に言えば馬鹿だ。私が今口にいる言語すら理解できないのではないか?」

はははっ、と快活に笑う師匠。キュートだ。ホント師匠は年齢に似合わずどこか幼い。すぐ怒るし。すぐ泣くし。すぐ笑うし。すぐ……理由もなく暴力振るうし。

どうして僕はこんな人の下にいるのだろうか？

血を吐きながら真面目に考える。

血が減ったからなのか妙に頭がすっきりしている。

うーん。

「ぬ。弟子。白目を剥いて何をしてるんだ？」

びくびくびくん。

「痙攣までしているではないか。むー……面白い動きだな。見直したぞ」

ストップ。

「動かなくなつたな。死んだか？」

……………間。

「もー、師匠つてば死ぬかと思いましたよ。マジ黄泉の国に片足ブツ込み。キツツー」

決して大げさな表現ではない。本当に本ツ当に死ぬかと思った。だつて自分の身体を自分で見下ろしてたもん。顔面血まみれで身体中土にまみれた轢かれた猫みたいな僕を自分自身で見下ろしてたもん。

「なに、あれぐらいで死ぬものか。私が若い頃はな、ケンカ相手をもっとボコボコのグツチャグツチャのもんじゃ焼きに仕立て上げていたぞ」

人間はもんじゃ焼きにはならない。そんな状態じゃもう死んでるだろうが！

「いや。死んではいなかったさ。集中……ナントカ室に一ヶ月とか二ヶ月とかそんな程度だ。平気平気。はははははー」

人はそれを平気とは言わない。重体じゃんよ。つてか集中治療室も分かんねーのかよ、馬鹿はどっちだ。

「それはそうと弟子」

「はい」

「お前に仕事だ。私とは別件でな」

「へ!？」

「期待しているぞ。貴様は曲がりなりにも私の最初で最後の弟子だからな。まあ、安心して良い。難易度はレベル14ぐらいの至極簡単な仕事だ。貴様ならさながら息をするが如く自然に当然に超然とした態度で持つて解決してくれるだろ……な!」

そんな笑顔で。ぺろっと舌を出してウィンクされても。 かわいいけど。

てかそのレベル基準は何だよ。

「ポケモン」

ああ、なるほど。ということはレベル14は簡単なほう……なのか？

「ただし貴様はマサラタウンにサヨナラバイバイした直後のサトシだ」

「勝てねエーッ!」

その例えが本当だったとしたら僕の勝率ゼロじゃん。

「勿論私はチャンピオン。殿堂入りしすぎて出禁を喰らった」

「しょぼっ……くは無いか」

「むしろ私が伝説のポケモンだ」

「何故ッ!？」

「そんな心配そうな顔をするな。今のは一部を除いて嘘だ。大丈夫大丈夫。 ちゅーこって今回の仕事の詳細だ」

いや、その一部が重要じゃねーか。

師匠は説明を始める。

場所：私立藤星学園

期間：解決まで帰ってくんない

依頼内容：校内で発生している幽霊騒ぎの原因の判明と解決（手段は問わず）。

幽霊：男性霊（悪霊化？）×1

師匠：伝説

要点だけ纏めるとこんなところだろうか。てか一部ってそれかよ。「ふーん。要は悪霊退治ってことですねー。確かにこれなら僕一人でもいけそうです。楽勝だッぜえってトコっすかね」

今まで師匠と二人で妖怪退治やら悪霊退治やら色々やってきたが結局僕一人でなんとかしたということが多々あった。ソロでの活動は初めてだが経験は豊富だ。

「慢心するな。馬鹿弟子」

ひゅん。風切音。

トゥーキック。師匠の代名詞ともいえる技。凶悪をそのまま形にしたような爪先が襲うのは大抵僕だ。当然今も。

どゅづん。めり込む凶悪。僕の顔面中央つまり鼻に。

「ふいぎゅあつ！」

奇声を残し2m程後方に吹っ飛ばされるは僕。

んがー、強烈だ。鼻骨がへし曲がる。上手く呼吸が出来ない。鼻血が逆流して喉に絡まる。やけに粘度の高い液体が喉を支配する。

不快。ううええー、気持ち悪い……！

「貴様の悪い癖だ。自分を過大評価しすぎるんじゃない。いつでも卑屈であれ。油断する隙もないくらい徹底的に卑しく生きていけ。足元を見続ける。地面を見通せ。大地を理解しろ。地球そのものを確認しろ。上を見るな。上を見るのはまだ早い。空に憧れるな。蒼穹に魅せられるな。曇天を受け入れるな。雨天に流されるな。有情と無情の狭間に身を置くな。やるんだったら突き詰める。人生を二極化するんだ。二つが同時に存在することはない。どちらかだ。選ぶことの重要性というのは――」

演説が長くないうちに僕は師匠に這い寄ってその足をぱんぱんと軽く叩く。

僕が移動した後には夥しい血液が大型の筆で書かれたかのように曲線を描いている。

「師匠。早くも話がずれてます」

「ぬ。またか。そんな事はないと思うのだがな……」
どばば。びちいやり。

「つてうわ、なんだその鼻血は！汚っ！」

汚っ、つて酷くないか。アンタが原因でしように。

「何を言う。不用意な発言をした貴様が悪いに決まっているだろうが。うん、ほらコレで鼻血をふけ。鼻からの酸素供給が途絶えると脳の働きが鈍る。とある爆弾魔の殺人鬼もそう言っていた」

ジーンズの尻ポケットからポケットティッシュを取り出しこちらに放り投げてくる。ポケットにポケットティッシュを常備している人など初めて見た。ちよつと感動。しかもそれが師匠ときた。意外すぎ。

なにはともあれ有難い。ティッシュを鼻に詰める。もう慣れたものだ。もしも鼻にティッシュを詰める世界大会があったらぶつちぎりでトップ賞確定。イエーアイムチャampion！！

「む！……今何か慢心の気配がしたような」
ぎっくう！

何この人、リーダー感度モノスゲー！！

「っそそそんなば馬鹿なっ。な。ははっはははははっ！！」

うつわー、自分の事ながらスゲー誤魔化し方下手ー。笑いで誤魔化せるほど師匠のリーダーは甘くないというのに。

じとーっ、と見つめられる。うう、そんな目で僕を見ないで下さい。心の中を見透かされているようで怖いんですよ、師匠っ！

「……ふん、まあ良い。仕事の話に戻ろう」

とは言いつつも疑惑の視線は消えず僕は極上に居心地が悪い。

「さっき言った通り今回はこの藤星学園に潜入し、事の真相を暴くことが目的だ。解決するまでは戻れない。潜入に関しては私の知り合いに頼んでおいたから大丈夫だ。転入生ということになるな。ああ。それと、貴様も慣れない土地に一人で居るのは不安だろう。だから案内人兼同居人兼助手を用意した」

「げ。師匠、僕が人見知りだって知ってるでしょう。嫌がらせですか。知らない人と行動するより僕は一人で行動したほうが気が楽でいいんですけど」

僕は人見知り。自分から人に歩み寄れないのだ。相手の考えている事を大抵ネガティブな方向に予想してしまつて被害妄想に陥る。まあ、要は慣れだと思ふのだが、僕は人より慣れるのが遅いらしい。「馬鹿。人見知りを治す為の措置でもあるんだ。それに情報は多いほうがいいだろう。現地人の協力も必要だ。あとな、アイツには人見知りなんてものは通用しないと思うぞ」

「……？どういふことです？」

師匠はミステリアスに微笑む。イツキユート。

「会つてみれば分かる。アイツは超強力だぞ、魅かれ過ぎないように気を付ける、フフフフ……」

背筋に悪寒。ぞくぞくつ。

どういふことなんだろう？

僕は深く考えることが苦手だ。というか嫌いだ。嫌いだから苦手なのだ。必然。うん。

師匠の言つ通り会つてみれば分かることなのだろう。その案内人兼同居人兼助手とやらに。

しかし今回の目的・仕事は事件の解決。パートナーがいようといまいと僕がキリキリキツチリバツチリ自分の役割を果たせばいいだけだ。すぐ解決。あっさり。大丈夫僕は出来る。そう大丈夫。うん大丈夫。よし大丈夫。よし、よし……よしっ！！

「準備は出来たか？出来たよな。それじゃ今から私が転送結界で現地まで飛ばしてやる」

僕の頭に手を載せる。

「転送：N＝F＝A＝K：藤星学園：H K＝1 M：K Y M I N D / M Y A」

紡がれる言の葉。師匠の掌から青色の光が漏れる。

「捌ッ！！」

頭部から飲み込まれるような感覚。生温かい空気が肌を包む。これまで何度となく経験してきた転送だがどうも慣れない。僕の慣れの遅さはオールマイティのようだ。時間の感覚はまるで無い。浮遊。無重力。脱力。弛緩する。世界、何？自分、何？何も分からない。忘却。脳細胞が弛緩していく。ん、あああ、な、ああ、んやんあ、あああ……。

? マナビヤ (2) (後書き)

前置きが長えッ!!

コノヤロ、がしっぱかつ。

すんません、もっとしっかりしますんで許してもらえませんか……
と言うとも思ったか! にゃーはっはっはっはー!!!

? マナビヤ (3)

とまあそんな訳で僕は師匠によってこの藤星学園に飛ばされてきたのだ。

藤星学園。男女共学。模範的な生徒育成と日々勤勉を校風として掲げている。何とも面白みの無いことだ。しかしそれが結果として現れているのだからあながち馬鹿にしたものでもない。進学校として着々とその土台を築いている真つ最中である。つまり歴史が浅いのだ。まだ創立してから十年程しか経っていない若手有力株。しかしそこにも理由はある。有力である理由が。

『不解の十人』。藤星学園の初代卒業者にして最大の功労者である十人。在学中から溢れるほどの才能を遺憾なく発揮していたという。視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の鋭敏感覚の異常発達による芸術方向への才能転換をした五人。さらに仁・義・礼・智・信の五常の徳をその身に宿した人間的に完成を迎えている最高峰の五人。前者の五人は性格が破綻している、というかいささか気狂いじみている為に社会には溶け込めず仙人の如き生活を送っているらしい。ただこの五人のお陰で芸術の世界的レヴェルは飛躍的に向上したことは言うまでも無い。反対に後者の五人は社会に多大な影響を及ぼす完成された人間は得てして頂点に立つものである。底辺をのたまうばかりの僕には一向に理解できないことではあるのだけれども。おつと説明には思考を挟むものではないな。とにかくこの完成された人類五人は日本のみならず世界に渡ってその才覚を示しているのだ。表世界のトップといっても差し支えない。

ま、すげえ奴らがOB・OGだってことが言いたいんだけど。伝わったかね？

そのOB・OG達がこれまた妙に母校に愛着を持っていて生徒育成に積極的に協力しているのだから優秀な人材が輩出されるのも頷ける。例えば凡人でも天才からの教授をみっちり三年間受けていれば

少なくとも凡才よければ秀才までの成長は遂げる筈だ。

とはいえ僕に言えることは唯一つ。

その十人と同級生だった奴ら……可哀想だよなあ。

てな感じで説明終わり。最後のは蛇足だったか？

師匠の言っていた現地協力者こそ『稗田神奈』である。事前に僕の情報は神奈に渡っていたらしく接触は比較的容易に行われた。容易？……違った。あれは……苦痛だ……。僕は嫌なことはすぐ忘れてしまう性質なのだ。しかし完璧に忘却することは無く、度々フラッシュバックして苦しむ羽目になるのだけれど。それが正に今である。「どーしちゃったんかなー？遠い目なんかしちゃって。意識トンでるんじゃないな？」

耳元でぼそぼそと呟くような甘い声。

僕の右肩に顎をちょこんと乗せた神奈が喋っているようだ。

「いや少し厭な記憶が蘇っただけだ」

「やや！わーの大切な建ちゃんを苦しめる記憶となー。許せませんな！ソレは！」

「お前と出会った時のコトを思い出してた」

「がーん！！」

がーん、とか口で言う奴初めて見たよ。

「ええええええー、うーそーでーしょー！？こんなに愛し合っている二人の思い出が……メモリーが……えええええええ、うーそーでーしょー！？」

「ああ、嘘だ」

とたんにはあつ、と笑顔が広がる。

「愛し合っている、という部分がな」

「ずうううん……」

またもや口で。笑顔が一瞬にしてヘドロの様な暗泥に変わる。

この感情の変化が見ていて面白い。からかうにしても遣り甲斐があるってもんだ。

ところで、と話を切り出す。

「それらしい霊は見つかったか？お前授業中ずっと暇してたって訳でもないんだろ」

ヘド口に沈んでいた顔にいささか光が戻ったような気がする。神奈はふわつと浮き上がり僕の頭の上に正座する。霊なので重さなんか無い訳だが頭の上に座られるというのは気持ちの悪いことではない。不快だ。少しばかり顔を顰めてみせたが神奈はそんなこと構いなしといったようにマイペースに話し始める。

「んー。たった十年ぼっちの歴史の浅い学校でも霊は無数にいるわけだけどなー。ちゅーか怪しいってカテゴリに入れるってんなら皆怪しいんだよな。それらしいもそれらしいで皆、霊らしくおどろおどろしく気ままに生活してるし、あ、霊に生活とはこれ如何に、死んでるのに？つと関係ない話はいいとして。2年A組教室のやつちやんだって家庭科室のたつくんだって図書室のうみちゃん&そらちやんだって疑いだしたらきりが無いなー」

ふーん、気付かなかったけど結構霊がいるのかこの学校。

学校は負の感情が溜まり易く発散し辛い場所である、吹き溜まりだ。そう師匠が言っていた。

霊は無意識に負の感情に惹き寄せられる性質があるのだという。学校での怪談話が後を絶たないのはそのせいだ。学校の七不思議。面白いじゃないか。

「でもさ、男性霊だつて見当はついてるんだ。単純計算で労力半減だろ」

「甘いなー建ちゃん。霊だよ霊。幽霊だよーひゅーどろどろー」

「……？それがどうした？」

頭上でえっへんと胸を張る神奈。

「説明してあげゆ。あのね建ちゃん。人は死んだ時点で人として終了な。これは大前提。成仏するかは各人の勝手だけどこの世に残った霊はこれから霊としての生が始まる訳な。死んでるのに生とはこれ如何に？って二回目だけどな。それは置いといて」

箱を持つジェスチャーをしてそれを右から左へ移動させる。

「人には人の常識があるように霊には霊の常識があるわけな。姿形なんて人だった頃の名残でしかないんだよな。なまじ人としての常識を捨てきれないからこそ生前と同じ姿をとってるわけで。常識なんかかなぐり捨てちゃって霊としての生を、突っ込みはナシな、謳歌できれば姿形なんてあつて無いようなものなんな。男であろうが女であろうが霊の形なんて信用に足るもんじゃないんな。でも簡単に捨てられるモノじゃないんだよね常識つて。ちゅーかそんなことしたら大抵は悪霊化しちゃうから外見通りで大体は合ってるんだけどそれでも疑惑は消えないよなー？確かめる方法でもあれば何とかんとか頑張れるんだけどなー」

なるほど。それは生きていては理解できない。

「そうか。二週間目にしてまるで進展なしか。……こりゃ長丁場になりそうだ」

厄介なことだ。

「おー、長引けー長引けー！」

頭上で万歳。喜ばしくないことを嬉しそうに言う奴だった。

お前は僕が不幸に陥っていくのが楽しいのか。

「違うなー。わーは建ちゃんと一緒に居られるのが楽しいから長引いて欲しいんな」

おんぶ、とまたもや口で言つて僕の頭から降る。

「僕は一刻も早く師匠の下に帰りたいよ。ああ、あのまないたのよ
うな胸が恋しい……」

「……。まさか建ちゃんつてば貧乳フェチ？」

「おうよっ！むしろ愛しているッ！」

親指を立てて爽やかに。僕の絶対に譲れない至高の嗜好思考。

「じゃ、わーは駄目なのっ！？このゆんゆんのおっぱいは無駄乳っ
！！？」

眼前に迫る二つの塊。制服の胸元がはだけて谷間が露出している。
眼福、とは思わない。思えない。

「そうだ。お前のおっぱいは正に無駄乳。見ているだけで寒気と怖気と吐気が同時に僕を襲うデンジャラスなおっぱいだ。僕にとってはボイズンに他ならない」

「ツツツツツ！」

「ゾンビに聖水みたいなの？」

「ツツツツツツツツツ！」

言葉にならないほどショックらしい。表現が某格闘漫画の戦闘シーンみたいになっている。

あ、石化した。

うーん。とりあえず石化した神奈は放っておいて思考を錯綜させよう。

形があつて形が無いもの。幽霊。霊。人の死後。一般的にはあまり知られていない重ね合わせの世界。重なっている。だから影響し合う。悪霊。人間。そこまで変わりはない。僕は思う。厄介。人間の方が厄介だ。悪霊は調伏。分かり易いじゃないか。武力行使。素敵な言葉。エクセレントワード。試行錯誤。嫌い。面倒くさいことは嫌いだ。人間関係。これもまた面倒くさい。人は一言で人を殺す。言葉は人を死に至らしめる。そして霊になる。負の感情。嫉妬。怨恨。愛憎。愛情？嘘。偽者。偽物。贋者。贋物。信ずるべきものは何も無い。霊はそして悪霊へ。今回は悪霊退治。誰だ？どこだ？誰が何処にいる？

あー、こんがらがってきた。

やっぱり僕は考えるのが苦手なんだよ。頭悪くて。

ホントに。

こんな時に師匠がいてくれたら。

ダメだ。これは僕の仕事だ。頼るな。師匠は僕を信用してこの仕事を任せてくれた。人を裏切るとは簡単だけど僕は師匠の信用を裏切りたくない。好きな人には嫌われたくないって単純かつ複雑な矛盾した感情が僕にも存在するのだ。うん。

「今日も一日が終わる。だがまだ始まったばかりだということを彼

らは知らない」

どこかのナレーション風に自分の状況を至極簡単に説明してみた。
意味は無い。

「 師匠。今頃なにしてるかなあ」

窓の外の夕陽に向かって一人呟く。 僕の後ろには長く黒い影が。
神奈の後ろには何も無かった。

? マナビヤ (3) (後書き)

私は貧乳フェチじゃないですよ？

等しく全てを愛しています。

愛しているんだ……愛してッ……いる……のにッッ……！
なーんつつて

？キヨミネツカ

「うん。さてと……」

弟子は仕事に送り出したし、私は今何をすればいいんだろう？

干し肉を噛み千切る。乾いた塩味が口の中に広がる。口を動かしながら脳を動かす。んー、でも食事をしている時は胃に血がいくからなあ。上手く頭が回らん。

「もぐもぐ……もぐもぐ……もぐ」

とりあえず今は食事に集中。

「もぐ……もぐもぐもぐ……もぐもぐ……よし食った！」

食事終了。

思考開始。

弟子は送り出した。簡単な仕事とは言ったけれども実は結構厄介な仕事。下手したら重傷・重体。上手くいけば死亡。いやこれは言葉の綾だ。言い直そう。予測できる一番最悪な結果が死亡。頑張ってくれ弟子。試練だ試練。元々は私にきた仕事だったけれども。面倒くさかったとかそんな理由じゃないよ？本当だよ？虎穴に入らずんば虎子を得ずというか、獅子の子落としというか。まあ師匠らしいことの一つでもしてやろうといった私の優しさ、みたいな？厳しさの中に垣間見える優しさ。母なる感情。庇護欲。支配欲？要するに愛のムチですよー。私なりの教育論っーこと。

うんうん。一人納得。

「それにしても暇だ。やることに無いつて苦痛だよな」

私は暇を持て余すのが嫌いだ。常に何かをしていないと落ち着かない。多動性症候群とまではいかないが、限りなくそれに近い。過去の反動だ。家に拘束されていた頃の記憶。その反動。

私の家。名家『清峰塚』。古くより妖怪や霊その他異形の退治を生業としている。現代社会においてこういった異形たちの存在はあまり知られていない。忘れられている、と言った方が正しいのかも

しれない。その多くは人に関わることなく独自のコロニーを作って自由気ままに暮らしているが例外はあるものだ。人に害をなす異形は退治されなくてはならない。それが人と異形の関係を保つ最適な手段なんだ。仕方ない。もつとも害ある異形ってのはいわゆるハミダシ者。あちらさんとしても厄介がっている場合が多いからどちらとしても文句は無い。とにかくこの関係は長く続いている。長くといいか永く。未永くこれからも。

突然だが光の粒を見たことがあるだろうか。こう、なんとなしに空なんか見るとちらちらと見えてくる光だ。見たこと無い人は青空とか雪原とか大自然が作り出すナチュラルカラーを見続けてみる。ふわふわとちらちらと何かが見えてくるはずだから。見えない奴は素質が無いから諦めな。何の素質かっていうのは今から説明するワケ。その光の粒。どこぞの偉い学者さんたちは目の錯覚だとか光の屈折の問題だとか言っているがそりや間違い。頭の固い学者さんたちは認めないだろうが、それも判断の世界だから良しとしよう。本題はその光の粒の正体。よく覚えとけ。重要単語だ。『宝殻』。そう私達は呼んでいる。霊的な粒子として空气中に無限に散在している物質。どんな人間でも元々の身体の機能として霊視は備わっているものだ。だが常識に縛られた、さっき言ったような学者さんたちは視ることが出来ない。無いと思っっているものを視ることは出来ない。当たり前。そういう奴らを除いた奴らは大抵この『宝殻』を視ることが出来る。しかし視えるだけ。清峰塚家は一步先を往く。『宝殻』の存在にいち早く気付き、どうにか利用できないものかと考えた。というのも『宝殻』の性質の一つに霊力を増幅させる効果があったからだ。異形と本格的に争いを起こしていた過去の清峰塚にとってこれを利用しない手は無いだろう。本来の清峰塚のお家芸は結界術。宝殻操作の技術を組み合わせ生まれた『宝殻結界術』。そのまんまだ。ネーミングセンスって奴が皆無で悲しくなってくる。おいおい私のご先祖様よ残念すぎるぞ。しかし単純な名前だからこそ分かり易くはある。

ただこの『宝殻結界術』。困ったことに扱いが非常に難しい。それもそうだ。概念に作用して世界から隔絶された空間を作り出す結界術。これ単体でも相当強力だし高難度な技術だ。更にそこに宝殻操作・宝殻変化を主とする宝殻術なる未知の技術を加えようというんだ。そりゃ扱いづらくもなる。完璧に使いこなせる術者は当時清峰塚にいなかった。当主ですら結界術を極めた時点で宝殻術に手を出さず諦めてしまった。

清峰塚は現状を打破出来る者を欲した。こうなってしまうただの意地だ。大人の意地張りなど見苦しいだけなのだが。自分達で作り出した術に踊らされるなど愚の骨頂。真の愚。愚。愚。愚。カッ。コ悪い。

そこで仕方なく私が動き出す。ほんの気紛れだった。当時4歳。鼻は垂らしてなかったけどそれなりに無邪気でやんちゃなガキだった。自分としては遊びのつもりで清峰塚の人間を片っ端から潰しにかかった。悪気がない子供の行為だとはいえ残酷だ。何十年も血反吐はいて泥嚙るような修行を続けてきたオッサン・オバサン達がたった4歳の子供にあっさりのされていく。しかも圧倒的实力差を見せ付けられて。自信が無くなるなんてモンじゃない。自分の人生に疑問を持つちまう。今までの人生は全て無駄だったんだろうか、つてな感じに。再起不能。to be continued……。

一通り清峰塚を破壊し終えた所で私は宝殻結界術を極め終えた。少年漫画なんかによく見られる戦闘中に覚醒する主人公。それと同じ現象が起こった。だから自分は物語の主人公なんだと思った。

神童と崇められた。私は小さな貧相な身で当主の座に就く。体の良い保護観察だ。清峰塚に縛られた。家族は皆好きだし、末端の構成員のお兄さん達も好きだし、家政婦さんたちも優しくて好きだし、何よりも私を取り巻く世界が好きだった。だから裏切れなかった。期待を。家を。世界を。全てを。全ての世界を。世界の全てを。

ま、拘束されてただけなんだけど精神的にね。

精神的に成長してきて自我もしっかりしてきて目的が出来た時私

は家を出た。19の時。心残りだったのは姉のように私を慕っていた可愛い妹分。けどあいつは私には劣るがそれなりの秀才だったから一人でも大丈夫だろ。

目的とはいっても酷く漠然としていた。まずは世界を巡ってみよう。これも拘束されていた反動の一つ。広い世界に憧れた可憐な小鳥。そんな可愛いものではないがイメージは近い。結果的に武者修行の旅になってしまっている訳だけれども。それもまた人生。上手くないところが面白い。

？キヨミネツカ（後書き）

師匠の出番。まだちょっとだけ続くんじや。

つか説明ばっかで盛り上がり欠けた。内容も短けーし。
ガンバリマスガンバリマスガンバラセテクダサイ。

？アヤカシシエキ

ちつとばかり長かった清峰塚の回想話。

こんなもので少しばかりは読んでいる方々もこつちの専門知識を理解できたのではないだろうか。

しかしいつまでも説明ばかりではつまらない。起承転結でいう起の部分を延々と繰り返しても物語は進行しない。

ではここいらで承の部分にも足を踏み入れていこう。

しいやあああん！！ごおおおうん……！！

物凄い閃光にかなり遅れてこれまた物凄い轟音が耳をつく。サンダー。稲妻。雷。神鳴り。

落雷によつて起こつた有機物が焦げたような臭いのする土煙の中から一人の影が現れる。それは身長は2mを超そうかという巨躯の男だった。背が高いだけではない。男はほとんど裸に近い状態（ブーメランパンツ着用）であり、その露出された部位のどれもに不必要なまでの筋肉を搭載している。鍛え抜かれた身体には一筋の傷跡も無い。その姿はさながらボディビルダー。油でテカテカにピカつてはいないものの一目でそれを連想させられる見事な筋肉だった。ツツコむ点はいろいろあるが、まあ、いの一に疑問に思うのは、何故筋肉ダルマみたいなこの男が雷と共に登場してしかも傷一つ負っていないのかという点だろう。

男はその体格には到底不釣合な程に繊細かつ丁寧に口を開いた。

「美哉どの。この度課された使命、我は見事完了せしめました」

男が呼んだこの美哉という名前。正式名称を清峰塚美哉という。清峰塚家の現当主であるが只今放蕩中。暢気に弟子なんか作つて、その弟子を命がけの戦場に送り出した後自分は暇なので回想をしていたという非情の女だ。考え無しと言つてもいい。

清峰塚美哉。彼女にはあだ名がよく付けられる。少し挙げてみる

と『みーさん』『みゃーちゃん』『みゃみゃ』『神童』『みみー』『ミーンヤング』『ややみ』『稀代の暴君』『みかな』『師匠』『化物』『絶対無敵』『鋼鉄粉碎』『豪腕爆砕』『鬼畜』などなど。不思議と姓をあだ名にする者がいない。改めて見ると不思議だった。というか通り名的なものも混じっているが。

男の事務報告とも取れるような発言を聞き、清峰塚美哉 別名：師匠 も口を開く。

「ごころうさま。ところでカミナには何を頼んでいたんだっけ？」

「お忘れですか？」

「そうだ。悪いか」

薄い胸を張る美哉。そんなことをしても一部のファン（弟子とか）が喜ぶだけです。しかも映像がないから視覚的に伝わりません。

カミナと呼ばれた男はえらくまじめな顔になり、

「美哉どのが悪いことなど万に一つも有り得ませぬ」

と言った。

カミナのこの喋り方は美哉への忠誠心の現れでもあるのだが、美哉自身は堅っ苦しいな、と日頃から思っている。しかし悪い気はしていない。自分が時代劇に登場するお偉方になったような錯覚に浸れるからだ。

「そう、そう。そうなのだ。さてもう一度聞くんが、カミナには何を頼んでいたんだっけ？」

「日本における靈気の異常増大についての原因の究明、で御座います」

そうだ。日本の靈気異常増大。

「あー、そうだ。……それで何か分かったか？」

「やはり美哉どの予想通り藤星学園に何かしらの原因があると思われる」

「やっぱり？弟子を送ったのは悪かったかなー」

「何と！もしや美哉どの、建正どのを藤星学園に送ったので御座いますか！？」

美哉はカミナの悲鳴にも似た叫び声を聞いてぎよつと目を丸くする。

「え、ええ、えっ？何か不味いことしたか、ヤバイことしたか？え、えゝゝっ！？」

目に見えて動揺する美哉。

わたわたと両手を振り回し、近くにあつた岩を破碎し粉碎し磨砕した。混乱したときに周りにある物に当たるのは美哉の悪い癖だ。小さい頃から直らない。因みにカミナや建正も度々犠牲になっている。

「終局で御座います」

ぶぶん！ぶぶん！

美哉の凶悪な腕を交わしつつカミナはやけにはつきり苦々しく言った。

「ふええ！？」

ぴたり。

美哉が暴れるのを止める。

顔は訝しげにカミナを睨みつけている。

「何だつて？もう一度言ってみる」

「終局で御座います。美哉どの」

あ？意味がわからないんだが。

終わった？何が？

美哉の疑問を表情から読み取ったのかカミナが付け加える。

「クミホが藤星学園に向かいました。もう到着しているのではないでしょうか？」

美哉は胸の前で腕を組みつつくくつ、と苦笑いした。

「あーそりゃ。……弟子には悪いことをしたな」

「それで御座いますね」

「クミホが出たらもう終わりなものな。　　うん、弟子に連絡でもしてやるか」

美哉は爪先で地面をがりがりとはきりながら一回転して円を作った。

人ひとりが入れるくらいのそこまで大きくない円だ。

美哉は円の中に入るとしゃがみこみ地面に両の指先をそつと触れさせた。

「虚像転送：N＝F＝A＝K：藤星寮101号室：HK＝1W：K
Y M I N D / M Y A」

ぶぶうつん。

爪先で抉っただけの円が青白く光り始める。

「調整：A A A：plus：straight：極：END」

円の中が光で満たされていく。深夜の山奥に自然的ではない明かりが出現する。

カミナからは既に美哉の姿は見えない。

カミナは思う。厄介なことにならなければいいのだが。

クミホ。凶兆の印。絶世の悪女。厄災の凶獣。

『はくめんとんせうきやうじのきつね
白面金毛九尾之狐』

日本三大妖怪の一つに数えられるらしい九尾のクミホには順序など関係ない。全てが破滅し、全てが破綻し、全てが破竹の勢いで禍々しく強制変換される。

危うい。存在そのものが危うい。

今でこそ我らの仲間であるが。気まぐれな奴のことだ。何時反旗を翻すか解らない。

「しかし……それを抑え付けている美哉どのが一番恐ろしいのだが」
この呟きが美哉の耳に届き折檻させられるのはまた少し後の話。

？アヤカシシエキ（後書き）

内容が…短……い…だと！？
次から建正に戻っていきましょう。

？オトメゴコロ

「ふいー。今日も1日ががんばりましたなー！　ね、建ちゃん！」

藤星学園の喧噪に満ちた長い一日も終わり、僕は神奈と共に学生寮へと帰ってきていた。うちの学生寮は基本的に一人部屋。十畳程の一人で生活するには十分なスペースが確保されている。ベッドに仰向けで横になる僕の真上には宙にぶかぶかと浮かんでいる乳オバケが一人居るわけだが。

「勝手に入ってくるなよ！　ここは僕の部屋だ！」

「いいじゃん。カタいこと言わないで。ホラ、宙に浮かんでれば邪魔じゃないじゃん？」

「ちらちらと横目に入ってくるお前の姿が不快なんだよ！」

「……そんなに私のこと嫌いかな？」

神奈はそう言うと、仰向けの僕に覆い被さり、僕の近く、目と鼻の先まで顔を寄せてきた。不覚にも心臓がどくどくと早鳴りする。違うぞ、この状況にドキドキなんてしてないからな。ただ不意に顔を寄せられて吃驚してるだけなんだからな！

誰に聞かせるわけでもない言い訳を心の中で叫びながら、僕は出来るだけ平静を装う。ここで露骨な反応をしてしまったら、神奈の思う壺だ。未だに人間の同年代の女の子とまともに喋ったことが無いのがバレてしまう。ああ、それだけは。恥ずかしすぎる。でも、しようがないじゃないか。小さい頃からずっとあの傍若無人な師匠に連れられて旅をしていたんだ！コミュニケーション能力に障害だつて出るわ！

コンコン、ガチャ。

「ちーっす！クミホ様が来てやったぞお！」

神奈の一言でこうまで動揺してしまうのが情けない。今も神奈は僕

の目をまっすぐに見て、自分が出した問いの答えが僕の口から出るのを待っている。そういえば僕は何故こうまで神奈の事を悪く言ってしまうのだろう。神奈の底抜けの明るさは師匠に通ずるところがある。僕は師匠のそんなところも魅力に思っていたはずだ。となれば神奈の明るさも僕にとっては魅力的に映っているのではないだろうか。うーむ。自分で自分を観測する事は出来ないからな。何とも言えない問題である。

「ねえ？　ちよつと？　おーい！」

あ、神奈の瞳が潤んできた。おいおい、やばいよやばいよ。って出川哲朗かよ！　ってノリツッコミしてる場合じゃなくて！　おい僕よ、女の子泣かせるのは流石に不味いでしょうよ。うっわ、どうする！？　こんな時どうするかなんて師匠教えてくれなかったしな。師匠だったらきつと「それも判断の世界だ」なんて意味が分かりそうで実ははぐらかしてるだけな言葉を残してくれそうだけど、ってそれじゃダメじゃん！？

「…………返事くらいしなさあ—————い！！！」

ぐるぐると思考の世界に深く潜っていた僕の意識が大音声で呼び戻される。

？オトメゴコロ（後書き）

ひっぴちびちです。ちまちまやっつけてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2807j/>

ヒエ魂!!

2011年8月21日03時20分発行